

「ふたつの図形で楽しく遊ぼう！

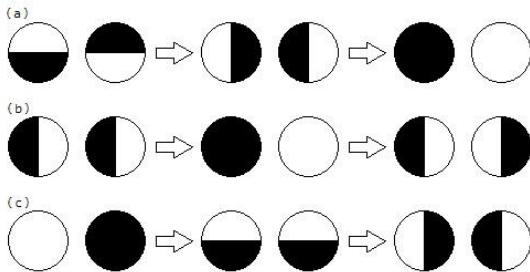
モーダス・ポネンス・パズル ～初級編 解答～

パズルの解答だけ知りたい方は、記事終わりの「マスターより」をご覧ください。

この外伝は湖畔シナリオ参加者でなければ意味がさっぱり分からないどころか、参加者であっても読めばおかしなイメージに取り憑かれる可能性が考えられます。

「じゃあ、次の (a) (b) (c) のなかで、『上下→左右→前後』の法則にあてはまらないのはどーれだ？」

座卓に広げられているのは一枚の紙。白と黒で色分けされた円が、ふたつずつのペアになって整然と並んでいます。



六郷悠理 [ろくごう・ゆうり] は順番に図形を指し示しながら、対面に座るアリストテレス [-] の顔色をうかがいました。

「難しいなー。うーんとー」

でも、アリストテレスは腕を組み、くちびるをひんまげて白目を剥くばかりです。

「ごめんなさい！ 私、笑ってませんでした！？」

ディレクターのOKを合図に、カメラ、照明、音声、それぞれのスタッフが座卓から離れた。ひとり慌てる悠理も、彼らに笑顔で迎えられます。

どうやら『モーダス・ポネンス・パズル』の“出題おさらいシーン”が、無事に撮影を終えたようです。

静寂から一転、騒がしくなった現場では解答編の準備が進められています。

その喧噪のなかで、

「うそー！ いまのオッケーなの？ ユーリ笑ってたってー」

唯一不満を訴えていたのは、安物ジャージの着こなしをスタイリストに正されながらのアリストテレスでした。腕組みで熱演を披露するさなかに、悠理が不覚にも吹き出したというのです。

たしかに彼の云いにも一理はあり、OKがあと五秒遅ければ、悠理は悶絶していたことでしょう。

「だって、ギャップがあり過ぎたんだもん。いままでのキリエと全然ちがうし」

目元をめぐり、悠理は弁明するばかりでした。

「昨日までトガ着て、哲学だー、ってやったでしょ。なのに、いきなりあの白目見せられたら誰だって笑うから。免疫無くなってるし」

するとアリストテレスも、反発すると思いきや、

「まー、たしかに俺もきつい。五十の歳であのキャラは、もう割り切るしかないねー……」

年齢相応の自意識と求められる芝居との往復に疲れたのか、率直な困惑を吐露していました。

ここは都心から車で二時間ほどの郊外にある民家です。縁側から望む景色には山々が映ります。

ふたりが何をしているのか不思議に思われるかもしれませんが、この家を使って、いわゆる“アリストテレスの民家”の撮影は行なわれていました。

眼前に広がっているはずの湖はどこにも見当たりません。それもそのはず、湖のシーンはより北へと向かった土地で、こことは別にロケが行なわれているのです。

「おつかれさまっす」

演者同士のつき合いも落ち着いたころ、庭先からひとりの男がちらちら歩いてきました。男は悠理たちよりずっと若く、高身長でがっしりとした体躯です。

「あ、ノーベルおつかれー」

「今日はまだ終わり？」

「ういっす。八代ぶん殴るカットが終わったところ。ぶっちゃけ、殴り足んねえ」

縁側に腰を下ろし、どっかりと足を投げ出したのはノーベル [-] でした。衣装の学ランもとっくに脱ぎ去り、私服でおしゃべりに加わります。

「もう春かよー。暖かくなるとヤバいぜ。冷房オフだし、照明も熱いし。包帯がかゆいのなんの。去年も夏のロケは死ぬほどきつかった」

服をまくって見せつけた肌には、包帯を巻いていた箇所に沿って、早々と赤い発疹が現れていました。

「うへー、ぶつぶつ。かゆそー」

「おっさんもおれの役やってみろって」

クスリを塗るようにアドバイスをした悠理ですが、ノーベルにはその手間すら面倒な模様です。

そうこうするうちに休憩時間も終了し、涙で乱れた悠理の目元もメイクスタッフが元通りに。出演者たちは、解答編を前に演技プランを練ることになりました。

台本は無く、誰が何を行なうかは各自の判断に任されています。しかも撮りは一回だけなので、ここで納得の行くものを用意しておかないと、本番でずぶずぶになってしまいます。

「(a)を苦戦しながら描いてー、(b)も描いてー、(c)は頑張ったけど描けなかったー、じゃダメかな」
「(a)と(b)が描けた時点で答えは(c)に決まっているのに、そこは無視する、って演出？」

「そうー。おバカだねー、って」

「ノーベル君はどう思う？」

「んー、おっさんの案だとメリハリが無くねえか？ ぐりぐり描いてるのを三回も見せられるわけだろ」

「なるほどー」

「たしかにそうだね。だとしたら……、あっ」

悠理が顔を上げました。廊下からスタッフの挨拶が聞こえたのです。お疲れ様ですー、お疲れ様ですー。ほかの現場から役者が戻ってきたのでしょう。

「来た来た！ ねえ、ちょっと手伝ってよ」

「なんだ」

廊下を渡って居間へと上がってきたのは、青いリュックを背負ったセシル・ローズ [ーー] でした。ノーベルは図形の描かれた紙をセシルに差し出し、手短かに、どこで詰まっているかを説明します。

今日のセシルはニットのキャスケットをかぶり、のどを保護するためにマスクを着用。裾が膝上まである水玉の白シャツを羽織っています。

すると、

「のっぺりしているな」

「だろ？」

セシルもノーベル同様の懸念を示しました。

「もっと(c)で苦戦してもよいのではないか。あるいは(a)と(b)をあっさりさせるか」

「じゃあ、(a)と(b)はキリエらしくないくらいサクサク解けたけど、(c)で大噴火、ってことにしようよ」

「噴火かー」

「それで見ると堪(た)えそう？」

「いいんじゃないかねえか？」

「解いて解いてするよりはマシだ」

「ふーん」

「あっ……。あとは、あまり私が笑わないように、ね」

「わかったー。だったら顔芸はやめとくー」

四人分のアイディアを合わせ、ようやくプランも完成。これで解答編の撮影も始められます。

ノーベルとセシルも、カメラが回りはじめたら、ただただ演者たちを見守るほかありません。

「(a)と(b)が描けたー！ 簡単じゃん！」

「やったね！ すごいよキリエ！」

「残りは(c)だなー。よーし頑張るぞ！」

アリストテレスは最後の図形でひたすら手間取り、話し合いどおり、ギャップを生みだすのに専念します。

何度も首をひねり、紙を破き、描画に挑み続けます。

そして充分過ぎるほどのタメを作ってから、

「えーい、こうなったらヤケクソだー！」

叫ぶや否や、安ジャージの下をずりりと脱ぎ、おやつに出されていた金平糖を尻に詰めはじめました。

ディレクターのカットと、

「『アヌス・ザ・スターズ！』」

アリストテレスの力(りき)んだ裏声が、風光明媚な山間(やまあい)に響きました。

悠理は怒りに顔を伏せ、ノーベルは目も合わせてくれません。でも、セシルだけは冷ややかな視線で座卓のふたりを射抜いていました。

「なんだよー！ お、俺だって一生懸命なんだぞ！」

アリストテレスは半泣きで、金平糖をひり出すためトイレに急ぎました。

☆ * ☆

「おつかれさまでした！」

「は一、やっと終わったー」

「まだこんな時間だけどハラ減ったぜ」

「食べてこなかったのか？ なら、皆で食事にでも行くか」

本日のロケは終了。出演陣はそろって、都心へと出掛けるようです。

「でもさー、さっきの、あんなに怒る必要ないじゃん」

「あれで怒らなかつたらどこで怒るのよ」

「自分なりに盛り上げようとしたのを汲み取ってよー」

そもそも『モーダス・ポネンス・パズル』は番外編として撮られています。本編よりもゆるい内容で、くだらない一幕もサービスとして盛り込まれています。それに貢献したのだとアリストテレスは言いたいのでしょう。

しかし、現実はそう甘くもなく、たとえば出題編に至っては、

「ひとり？」

「マジかそれ」

「そうなの。出題編を見てパズルの答えを送ってくれたひと、それしかいなかったんだって」

悠理の指摘どおり、反響はマニアックどころか、むしろ慈悲に近いものでした。企画したスタッフだけは空威張りでしたが、その人物には始末書が待っていました。

こうなれば、解答編の行く着き先も、予想がつきそうなものです。

「羽田さんの言ったとおりであったね」

「そうだねー」

「続編やんのか？ 頼むから巻き込まないでくれよ」

「まったくだ」

四人は誰ひとり、パズルの未来を期待していませんでした。それぞれ、おまけとは関係のない、メインシーンでのお芝居に手一杯という理由もあるのでしょう。

いつでも皆の力を借りながら、撮影にのぞめるとは限りません。ときには自分ひとりを頼りにして、演技を組

み立てる必要もあります。

「ところで、みんなは明日何するの？」

「おれとセシルはスタジオで《^{アバター}霊験》」

「おー、ついに出るんだー。どんなCGになるんだろ」

「私たちの時は結構たいへんだったよ。足場組んで、実際に跳んでみせないといけなかったから」

「かったりいなあ。ま、どうせおれは、『呪え数えるな』！ で手え出せばいいだけだもんな。透明だから最初からそのまんま。あとは特効の爆破と合成だろ。八代はオンリーで、『助けてくれー！』って絶叫の練習してたぜ」

「数の《^{アバター}霊験》だもんね。私もそんな台詞録るのかな」

「ユ-uriなら逆に、殺せるもんなら殺してみなさいよ、とか言いそ……、イッテー！ ぶつことないだろー！」

「てめえは、いまんとこ立ちっぱのシーンばかりか」

「ああ。今日もそうだったが、長回しが難儀だ。じっと見つめる芝居はまばたきが出来ないのがつらい。まあ、ワイヤーで吊られるのは楽しかったがな」

銘々の口数は減ることを知らず、食事が始まればなおのこと喧（やかま）しくなるはずです。それがより良い芝居に結び付くのであれば、雁首を突き合わせた甲斐もあるというものでした。

昨年春前に顔合わせをしてから、ずっと良好な関係が築かれています。

スタッフたちは機材をクルマに積み込み、四人が駐車場に着いたころには、もう出発するだけとなっていました。

「ノーベル君、クルマは？ こっちは私とキリエ。一緒に乗る？」

「わりいな。マネージャー、用事があるとか言って先に帰りがったんだわ。セシルはどうすんよ」

「今日は旦那の運転で来ている。そっちのクルマを後から追おう」

四人は民家を離れ、悠理の先導で出発しました。英気を養い、明日からはさらなる撮影が待っています。

そして、一年以上かかったこのロケも、夏が来る頃にはすべてが終わるのです。

■マスターより

答え：(c)

解答編をどう書くか手こずっているうちに時間だけが経ち、ついに半年後、まるでリマインドのようにお便りをいただき重い腰が上がりました。

そのお便りが無ければ、本気で本文抜きの「答え：(c)」だけでお茶を濁すところでした。ありがとうございます。

中級編、上級編は問題も作成済みなので、全リアクション集が出るようならそちらにでも載せます。

ここに書かれている内容・情報は、「GDDD外伝」内限定のものであり、公式設定と食い違う場合があります。ここに書かれた内容を元にしたアクションは、原則採用されません。

このリアクションの複製および、個人サイトやブログ等での無断転載・転用、無断配布等は固く禁止しております。

※個人としてゲームを楽しむための交流ためであっても例外ではありません。
